

ゴルフパフォーマンスとライフスキルの関係

—大学ゴルフ部員に着目して—

スポーツビジネス研究領域

5012A029-2 齊藤 麗

研究指導教員：木村 和彦 教授

【序論】

近年では、世界最高峰といわれているアメリカツアーに参戦する日本人選手が増加し優勝するなど世界に通用するようなプレーヤーが見受けられるなど、ゴルフの普及において、競技者のパフォーマンス向上は重要な要素の1つである。しかしながらプロゴルファーによる不祥事が後を絶たない。このことから、ゴルフ選手の日常生活における、様々な問題に対する適切な処理が出来ていないと考えられる。

ところで、日常生活で生じる様々な問題や要求に対して建設的かつ効果的に対処するための能力はライフスキルと表現される(WHO,1997)。スポーツとライフスキルの関係に着目した先行研究は多くみられるが、その中でも、清水・島本(2012)は、競技成績が高い者はライフスキルを獲得していると述べるなど、競技力とライフスキルには大きな関係があることが指摘されている。例えば、ゴルフの試合で実力を発揮するために、競技場面における心理的スキルだけでなく、日常生活も選手のスポーツパフォーマンスや実力発揮に影響を与える要因である(グラハム・白石,1992)という指摘があるが、残念ながら、実証されたものではない。

このことから、ライフスキル獲得の重要性を、理論的な説明とともに、ライフスキルの獲得が実際どのようなパフォーマンスと結びつくのかについての詳細な説明が求められていると言えるだろう。ライフスキルとパフォーマンスの関係が説明できることで、選手に対して日々のスポーツ活動を通じて日常生活で役立つスキルを学び、そのスキルが競技力の更なる向上に寄与すると考えられる。またスポーツ集団をマネジメントする指導者にとっても、選手を導く方向を明確に持つことが

可能となるだろう。

【研究目的】

本研究においてはゴルフにおける技能を向上させるに、ゴルフに必要な能力を獲得するだけでなく、日常生活から見直す必要があることを提示するために以下の2点を目的とした。

1. ゴルフパフォーマンスのどの要因がハンディキャップに影響を与えるのか明らかにする。
2. ゴルフパフォーマンスとライフスキルの関係について、どちらを起点として因果関係が成り立っているのか明らかにする。

【研究枠組みの提示】

まずSTEP1として、ライフスキル尺度及び、ゴルフパフォーマンス尺度について、妥当性と信頼性の検証を行う。その後、STEP2では、ゴルフパフォーマンスを獲得することで、ハンディキャップに影響を与えるのか検証する。STEP3では縦断調査を用いて、ライフスキル獲得により、ハンディキャップに影響を与える要因となるゴルフパフォーマンスが向上されるのか検証する。またゴルフパフォーマンスを獲得することで、ライフスキルが向上するかについても検討する。

【研究方法】

調査時期は2013年7月と9月に2回実施した。調査対象は関東学生ゴルフ連盟に所属する1部リーグ5校、2部リーグ2校、4部リーグ1校の男子297名、女子89名である。調査内容は基本的属性、ゴルフパフォーマンス尺度、ライフスキル尺度を、調査内容とした。

【分析方法】

STEP1では確認的因子分析とCronbachの α 係数にて妥当性と信頼性を検討する。STEP2では重回帰分析を用いて検討する。STEP3では2波の交

差遅れ効果モデルを用いて変数間の因果関係を検討する。

【結果と考察】

STEP1 尺度の信頼性と妥当性の検討

調査内容である各尺度の妥当性と信頼性を検討した、その結果、ライフスキル尺度において、妥当性、信頼性ともに一定の当てはまりの良さが確認された。ゴルフパフォーマンス尺度については、妥当性は得られたものの、信頼性に関して、若干課題の残る結果となった。しかしながら先行研究においても、本研究の結果に近い値であったため、今後の分析に使用することとした。

STEP2 ハンディキャップとゴルフパフォーマンスの関係

重回帰分析の結果、ゴルフパフォーマンスの「精神的強さ」、「プレイの自動化」がハンディキャップを向上する要因であることが示された。これは、精神的に強く、スイングが安定している学生はスコアを向上させる要因であることが考えられる。また「飛距離への挑戦」、「リスク回避」からはハンディキャップを低下することが示された。これは攻撃的でも保守的でもスコアを低下させることであり、スコアを向上させるにはその場にあった対応、いわゆるコースマネジメントが必要であることを示唆した。

STEP3 ゴルフパフォーマンスとライフスキルの関係

ゴルフパフォーマンスとライフスキルの関係を2波の交差遅れ効果モデルにより変数間の因果関係について検証した。その結果、双方向の因果関係は確認されなかったことから、必ずどちらかを点として因果関係が成立していることが明らかとなった。ゴルフパフォーマンスの「リスク回避」「ネガティブな情動・認知」、「改善への探求」を起点としライフスキルの「情報要約力」、「自尊心」、「前向きな思考」、「親和性」、「感受性」、「対人マナー」を獲得することが明らかとなった。これらの要因は、ハンディキャップを直接的に向上する要因ではないが、ゴルフをするうえで必要不可欠であると考えられる。そのため、自身の実力には繋がらなくても、自分自身で安全にプレイすべきなのか、調

子が悪くても頑張ろうと考えることが、ライフスキルを獲得することである。

またライフスキルの「計画性」、「情報要約力」、「リーダーシップ」、「感受性」を起点とし、ゴルフパフォーマンスの「心理的準備」、「飛距離への挑戦」、「リスク回避」、「プレイの自動化」、「パター技術」、「コミットメント」を向上することが明らかとなった。ライフスキルの「計画性」、「情報要約力」、「リーダーシップ」を獲得することで、ハンディキャップを向上させるために必要な「プレイの自動化」を促進することが明らかになった。これはプレイを自動化させるために、日々多くの時間を練習に費やしている学生にとっても、学生を指導している指導者に対しても、日常生活を見直すことが、競技力のさらなる向上に寄与する結果ではないかと考えられる。

【結論】

下記の図1のように大学ゴルフにおいてライフスキルの「計画性」、「情報要約力」、「リーダーシップ」を獲得することで、ゴルフパフォーマンスにおける「プレイの自動化」が向上し、ハンディキャップを向上することが示唆された。今後選手は、ゴルフに必要な能力を身に着けるのではなく、日々の何気ない生活が、ゴルフへ影響していることを把握し、日常生活から改善する必要があるだろう。また監督・コーチといった指導者は、ライフスキルといった、日々の生活から学生をマネジメントすることが求められているといえるだろう。

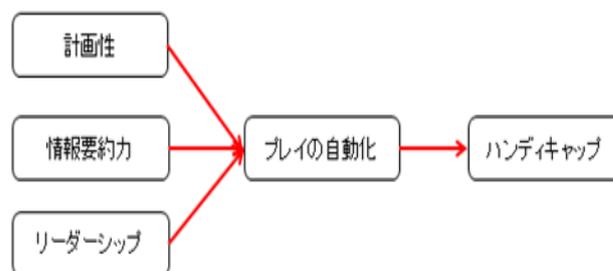


図1 本研究にて得られたモデル